

李賀と時間

河田 聡 美

- 一、直線的時間認識
- 二、円環的時間認識
- 三、時間的存在としての人間
- 四、時間からの解放
- 五、まとめ

李賀は、心ない人々の言によって、若干二十歳にして、科挙受験の機会さえも永久に奪われた人物である。それ故、溢れる才能を自負しながらも、若くして将来への夢を断たれた絶望感と不遇感は、彼の詩の随所に、暗い激情となつて迸り出ている。ここで特徴的なことは、李賀のこうした激情が、過ぎ行く時間への強烈な意識と常に一体となつて展開されているという点である。李賀詩において、彼の心を揺さぶる様々な感情は全て、時間に対する恐怖へと収斂されて行く。李賀は、人間という存在の基盤をなす時間性に、誰よりも敏感な詩人であった。

李賀は詩の中で、時間を次の二つの側面から把握してい

る。一つは、一人の人間の誕生と共に流れ出し、死と共に消滅する時間である。時間―自己とも、人間という存在の時間性とも言い換えて良い。これは、各個人に固有の時間であり、その特徴は有限性にある。これに対してもう一つの時間は、固有の存在から離れて一般化された時間―過去から未来へと綿々と流れる時間である。この時間の特徴は無限性にある。前者を根源的時間とすれば、後者は自然的時間と言えよう。^①

根源的時間を意識して生きるとは、生命の有限性、つまりは死と対峙して生きることである。これに対して自然的時間は、公共性と無限性によって、各個人に固有の生命の有限性及び死を隠蔽する。我々は、根源的時間を心のどこかで常に意識しながらも、それを自然的時間へと摩り替へて生きていくのである。

しかるに李賀詩においては、自然的時間は、李賀という

存在の有限性を隠蔽する方向には作用していない。二つの時間を持つ有限性と無限性という特徴を、対立的に認識することによって、自分という存在の有限性をより強く確認する方向へと追いつめられているのである。しかも李賀は、この二つの時間の流れを、直線と円環という、二つの対極的な形象で認識することにより、その対立性をより鮮明化してしまっている。

ここでは、直線の時間（根源的時間）と円環的時間（自然的時間）という二つの時間認識を、李賀詩の内に読み取って行く中で、前述したような李賀の時間認識の全体像を浮き彫りにして行きたい。また、自分の不遇を綿々と述べる李賀が、一方では現実を超越したような詩篇を数多く書いた理由は何であろうか。第四章では、時間という視点から、神話的色彩の濃い詩篇が持つ意味を考察してみたい。

一、直線の時間認識（根源的時間）

直線の時間認識は、後に述べる円環的時間認識と共に、世界各地において古くから見られた時間認識である。過去から未来へと、はつきりとした方向性を持った直線のイメージ。李賀は、自分の存在と密接な関わりを持つ根源的時間を、この直線のイメージで描いている。直線の時間認識は元来、生命ある者全てに課せられた「生↓老↓死」と

いう運命に対する、素朴な認識から生み出されたもので、再生もしくは若返りが不可能であるという認識から、不可逆性の特徴としている^③。その意味では、李賀が根源的時間を託するには、最適の時間認識であったと言える。只、唯一異なるのは、従来の直線の時間認識が、自然的時間を表わす時間認識であるのに対して、李賀のそれは、根源的時間を表わす時間認識であるという点である。そのため、李賀の直線の時間認識は、長くても百年前後という、有限性を特徴としている。

では、李賀の詩の中から、直線でイメージされた根源的時間認識（以後は、直線の時間認識と呼ぶ。）を見てみよう。先ずは、『詠懐一首』其二の冒頭四句である。

日夕著書罷 日夕書を著し罷めば

驚霜落素絲 驚霜素絲落つ

鏡中聊自笑 鏡中聊か自ら笑ふ

詎是南山期 詎ぞ是れ南山の期ならんや

右は、詩作から解放された夕暮れ時、目の前にハラリと落ちた自分の白髪にふと目を止めた李賀が、鏡で頭髮の白さを確認しながら、「これはどうも、長生きしそうにないぞ。」とつぶやく姿を描いたものである。ここで李賀は、自らの白髪「素絲」に刺激されて、やがては訪れる自分の

死を意識するに至っている。つまり、老いを自覚する中で、死へと向かう有限・不可逆なベクトルとして、自分の生（根源的時間）を意識するに至っているのである。

この詩の後半で、李賀は、人生についての深い内省へと導びかれて行く。「頭上に幅巾無く、苦蘖已に衣を染む。見ずや清溪の魚、水を飲んで自ら宜しきを得。」ここには、静かな田舎で、詩作をしながら埋もれて行く自分を、それで良いとも、歯痒いともする心境が綴られている^⑤。このように、李賀の人生への思索は、時間的存在（有限性）であるという自己認識を出発点とすることが多い。

李賀の詩にはまた、植物の枯れ行くイメージを借りて、人間の老い行く運命（死へと向かうベクトル）を強調しようとした表現も多い。『大堤曲』の最終四句と、『浩歌』の最終四句を見てみよう。

①莫指襄陽道 襄陽の道を指す莫かれ

綠浦歸帆少 綠浦帰帆少なり

今日菖蒲花 今日菖蒲花

明朝楓樹老 明朝楓樹老ゆ

②漏催水咽玉蟾蜍 漏催し水咽ぶ玉蟾蜍

衛娘髮薄不勝梳 衛娘髮薄く梳るに勝へず

看見秋眉換新綠 看みる見ん秋眉の新緑に換はるを

二十男兒那刺促 二十の男兒那ぞ刺促たる

右の二例のうち、①においては「今日菖蒲花、明朝楓樹老」が、②においては「看見秋眉換新綠」が、植物のイメージを借りて、直線的時間認識を表現した言葉である。

「今日は菖蒲の花のように美しい顔も、明日の朝には、秋に散る楓のように老い去ってしまうのよ。」「みるみるうちに、夏を思わせる新緑の眉も、秋の霜が降りたような白さへと変わって行く。」

秋には枯れ行く木々の緑や草花等は、その生命サイクルが人間よりも短いために、生の瞬間から、一直線に死へと下降して行く運命を、人間の目にも明瞭に印象づけることのできる素材である。右の二詩には、植物のイメージを借りることによって、死へと向かう人間の運命が、何倍も鮮明に写し取られている。

ところで、②の第四句「二十男兒那刺促」は、生命の有限性を見据えた上で、自分の人生の在り方を思索する李賀の、一つの決意を記したものである。「みるみるうちに、残り少なくなつて行く人生。人にこきつかわれて生きるなど、まっぴらだ。」『詠懷二首』其二と同様に、ここでは、時間的存在であるという自己認識が、人生への思索の出発点となっている。

今までに見て来た詩では、李賀の死へ向かう存在としての自己認識は、人生を考える上で、どちらかと言えばプラスに作用していた。少なくとも、限られた人生の中で、よりよく生きてやろうとする意志は読み取ることができた。が、より多くの場合、李賀のこうした自己認識は、彼の実人生上の不遇・病等と重ね合わされて、彼を更なる絶望へと追い込む方向に作用している。『感諷五首』其二の前半八句を見てみよう。

奇俊無少年 奇俊少年無く

日車何躡躡 日車何ぞ躡躡たらん

我待紆雙綬 我雙綬を紆ふを待てば

遺我星星髮 我に星星たる髪を遺る

都門賈生墓 都門賈生の墓

青蠅久斷絶 青蠅久しく断絶す

寒色搖揚天 寒色揺揚の天

憤景長肅殺 憤景長く肅殺たり

まず第一・二句で、刻々と経過して行く時間と、その中で老いて行かざるを得ない人間の運命を語った李賀は、第三・四句において、不遇の中で虚しく老いて行く自己を語る。「いくら才能があるからといって、いつまでも若くはいられない。高官になる日を夢見ているうちに、太陽は日

々めぐり、私は刻々と老いてきてしまった。」この詩の主題は、不遇な現状への憤りである。が、この前半四句には、そうした憤りと共に、自分の一回きりの人生を、無為のうち消費させられている者の、焦りと無念の情が色濃く滲み出ている。李賀が不遇を嘆く詩には、このような過ぎ行く時間への焦りが常に底流にある。その意味でも、この詩が、時間への言及から歌い起こされているのは象徴的である。

第五・六句は、刻々と老いて行く自分を強く意識する李賀が、賈誼の墓を通して「自分の死」を見つめる姿を描いたものである。青蠅すらもが訪れることのなくなった、賈誼の墓。「青蠅久断絶」は、死による生との絶対的な断絶を象徴している。死んだ賈誼の前に、もはや時間は無いのである。賈誼の墓によって李賀は、自分の生(根源的時間)が、死へと向かって一直線に突き進む、有限・不可逆なベクトルであるという事実を、改めて確認すると共に、恐るべき死の正体を見据える事にもなったのである。

第七・八句は、李賀と同様、讒言によって、一回きりの人生を狂わされた賈誼の恨みを、李賀が代弁したものである。人生の有限性と不可逆性を、強く意識すればする程に、無為に流れた自分の人生を、取り返しにつかないものとし

て焦る気持ちは募る。「死して千年の後にも、墓のまわり
に春の気を寄せつけぬ程の深い恨み。」この句には、自分
の才能を試す機会さえをも奪われ、貴重な時間（人生）を
無為の内に費やさねばならなかった李賀の、恨みの深さが
投影されている。

また、ここにはあまり明瞭に記されていないが、詩の背
後に流れている自然的時間の無限性が、賈誼に代表される
人間の有限性を、くつきりと浮かび上がらせていることに
も注目すべきである。では、第二章において、自然的時間
の描写を見てみよう。

二、円環的時間認識（自然的時間）

時間の流れを円環的に捕える円環的時間認識は、日常生
活の中で観察し得る様々な周期性に触発されて、生み出さ
れた時間認識である。また、円が有限の中に無限を包み込
む最も古い手法であったことも、円環的時間認識の成立の
一要因であった。それ故、円環的時間認識の特徴は、循環
性と無限性にある。

この円環的時間認識は、有名なインド・ギリシアの他
に、中国にも見い出すことのできる時間認識である。ダー
ク・ボッダは、『中国哲学における調和と葛藤』の第一章
「宇宙のパターン」の中で、道教・陰陽五行家に始まり、

十一世紀以降の新儒教までの中国哲学を通観して、こう述
べている。「これら諸家すべてに顕著なのは、天地は恒常
的・流転の状態にあり、この流転は両・極間の永・久・振・動・閉・鎖
路・内・の・循・環・運・動・の・い・ず・れ・か・か・ら・な・る・固・定・的・で・か・つ・予・測・可・能
なパターンに帰着すると信じていたことである。」（傍点は
筆者。）ボッダの言は、直接的には時間に言及したものでは
ない。が、変化し時間であれば、宇宙を循環の相で見ると
国に、時間を循環の相で見ると時間認識を見出し出しても、不
自然ではないであろう。マリイ・ルイゼ・フォン・フラン
ツは、易经などを引きながら、「中国人は循環的な時間のモ
デルを持っていた」と言明している。

こうした中国の伝統に則って、李賀もまた、過去から未
来へと遙かに続く自然的時間を、循環運動の相で捕えてい
る。『官街鼓』を見てみよう。

曉聲隆隆催轉日 曉聲隆隆轉日を催し

暮聲隆隆催月出 暮聲隆隆月出を催す

漢城黃柳映新簾 漢城の黃柳新簾に映じ

柏陵飛燕埋香骨 柏陵の飛燕香骨を埋む

碓碎千年日長白 碓碎すること千年日長に白きも

孝武秦皇聽不得 孝武秦皇は聴き得ず

從君翠髮蘆花色 君が翠髮蘆花の色となるに従せ

獨共南山守中國 独り南山と共に中国を守る

幾回天上葬神仙 幾回か天上に神仙を葬る

漏聲相將無斷絶 漏声相將いて断絶無し

第一・二句は、明け方と夕暮れ時に、毎日打ち鳴らされる鼓の循環運動を示したものである。太陽と月の循環を促すように、千年もの間打ち続けられて来た鼓の傍で、孝武・秦皇が死に、今また一人の人間が、死へと向かうベクトルを滑り落ちて行く（第五・七句）。しかし、鼓の循環運動は、次々と死んで行く人間をよそに、長寿の象徴たる南山と共に、永遠に繰り返されて行くのである（第八句）。

第九・十句は、鼓の循環運動が超えて来た遙かなる時間を、他の循環運動によって表わそうとしたものである。第九句では、長命で知られる神仙の死という、あり得べからざる事象の幾回もの循環を、第十句では、水時計の水の滴りの無限回の循環を描くことによって、歴史を超えて行く長大な時間が表わされている。

詩の構成を見ると、直線的時間（人間の生命）の描写が、円環的時間（自然的時間）の描写に前後を挟まれる形で、挿入されている事に気づかされる。つまりこの詩は、内容・構成の双方から、無限なる自然的時間のほんの一部分しか存在し得ない、人間の果無さと無力さを露わにしている

のである。第一章で見た『感諷五風』其二では余り明らかではなかったが、根源的時間と自然的時間との対立的把握を、ここからは明瞭に読み取ることが出来る。

ではもう一つ、『浩歌』の冒頭四句からも、李賀の円環的時間認識を見てみよう。

南風吹山作平地 南風山を吹いて平地と作し

帝遣天吳移海水 帝は天吳をして海水を移さ遣む

王母桃花千徧紅 王母の桃花千徧紅に

彭祖巫咸幾回死 彭祖巫咸幾回か死す

右の四句は、三つの荘大な循環運動を並列することによって、長大な自然的時間の経過を表わそうとしたものである。その三つとは、第一・二句の、海と陸との循環であり、第三句の、三千年に一度咲く桃の花の千回もの循環であり、第四句の、長命で知られる彭祖・巫咸の幾回もの死という循環である。

こうして、自然的時間の長大さを見せつけたこの詩は、「漏催し水咽ぶ玉蟾蜍、衛娘髪薄く梳るに勝えず、看みる見ん秋眉新緑に換わるを、二十の男兒那ぞ刺促たる」という四句で結ばれる。水時計の滴りの循環という、小さなサイクルの循環運動の傍で、刻々と年老いて行く人間。こうした人間にとって、冒頭に記された巨大な循環運動の中を

生き抜くことは、絶望に近い。この詩が、自然的時間と根源的時間とを対立的に把握する中で、人間が存在し得る時間的短かさを鮮明化しているという点では、『官街鼓』と同じである。

この他、自然的時間のみを描く中で、人間存在の微小さを象徴したような作品もある。『夢天』を見てみよう。

老兔寒蟾泣天色 老兔寒蟾天色に泣く

雲樓半開壁斜白 雲樓半は開いて壁斜めに白し

玉輪軋露溼團光 玉輪露に軋り団光溼ふ

鸞珮相逢桂香陌 鸞珮相逢ふ桂香の陌

黃塵清水三山下 黃塵清水三山の下

更變千年如走馬 更まり変わる事千年走馬の如し

遙望齊州九點烟 遙かに望む齊州九点の烟

一泓海水杯中瀉 一泓の海水杯中に瀉ぐ

前半四句は、天界の描写。後半四句は、天界から見た、自然的時間と地上の描写である。海から陸へ、陸から海への荘大な循環の相で捕えられた、千年もの長い時間も、天界から見れば、馬が走り抜けたほどの短い時間である。広大な中国全土や海も、天界から見れば、小さな九つの点や杯ほどにしか見えない。

詩の中とは言え、こうした高次の視点を持った李賀が、

再び現実へと立ち戻った時、自分という存在の卑小さに、どれほどの絶望を感じたかは想像に難くない。『天上謡』にも、同様の視点から描かれた時間描写がある。

自然的時間の描写は、李賀詩の場合常に、李賀という存在の有限性及び卑小さを鮮明化する役割を果すのである。

三、時間的存在としての人間

李賀の人生への思索が、常に死に向かう存在としての自己認識を出発点としていた事は、第一章で見て来た通りである。自分という存在の時間性(有限性)を認識すること。これは、自分の未来に、確実に立ちほだかっている死を、常に直視して生きるという、過酷な生を要求するものである。

李賀は、『官街鼓』では、自然的時間の前での人間の無力さを真理として語り、『浩歌』では、有限なる人生を前向きに生き抜く決意を語っている。が、時を刻む太陽の巡りに目を転ずれば、こうした冷静さも一瞬にして揺らぐ。李賀は、刻々と生命を削り落として行く時間を前にして、言い知れぬ焦りと絶望に身悶えするのである。

ここでは、人間の存在基盤である時間性に対して、李賀の抱いていた絶望の深さを、時間を主題とした詩の中に見てみたい。

苦書短

- ① 飛光飛光
② 勸爾一杯酒
③ 吾不識青天高
④ 黃地厚
⑤ 惟見月寒日暖
⑥ 來煎人壽
⑦ 食熊則肥
⑧ 食蛙則瘦
⑨ 神君何在
⑩ 太一安有
⑪ 天東有若木
⑫ 下置銜燭龍
⑬ 吾將斬龍足
⑭ 嚼龍肉
⑮ 使之朝不得迴
⑯ 夜不得伏
⑰ 自然老者不死
⑱ 少者不哭
⑲ 何爲服黃金
⑳ 吞白玉

飛光よ飛光よ

爾に一杯の酒を勧む

吾識らず青天の高く

黃地の厚きを

惟だ見る月は寒く日は暖かに

來りて人の壽を煎るを

熊を食へば則ち肥え

蛙を食へば則ち瘦す

神君何くにか在る

太一安くにか有る

天の東に若木有り

下に燭を銜む龍を置く

吾將に龍の足を斬り

龍の肉を嚼み

之をして朝には迴るを得ず

夜には伏するを得ざらしめんとす

自然老者は死せず

少者は哭せず

何為れぞ黄金を服し

白玉を吞まん

⑳ 誰是任公子

誰か是れ任公子

㉑ 雲中騎白驢

雲中白驢に騎る

㉒ 劉徹茂陵多滯骨

劉徹の茂陵滯骨多く

㉓ 嬴政梓棺費鮑魚

嬴政の梓棺鮑魚を費す

「飛光飛光」という太陽への呼びかけで始まるこの詩

は、第五・六句に至って、李賀の時間に対する被害者意識

を一挙に爆發させる。

第五句は、日月の循環によって表わされた、自然的時間の描写である。自然的時間は無限なるが故に、時を経過させて行くことに何のためらいもない。それに対して、生命の有限性を強く意識する李賀は、時間の歩みを少しでも遅らせて、自分の生命が失われて行くのを押し止めんことを切望している。第六句は、李賀の切なる願いを踏みにじって、正確無比な循環を繰り返す日月への、苛立ちの表現である。「どうして月と太陽は循環を繰り返して、私の生命を削り取って行くのか。」時間を前にして、無力な李賀は、生命が短縮されて行く恐怖にただ怯えるだけである。

李賀はその目差しを、他の人々の上にも向けて見る。そこには、自分と同じく、死へと向って下降して行く人々の姿があった。「美味い物を食べれば肥え、不味い物を食べれば瘦る。金持ちと貧乏人の違いはそれだけで、死に行く

運命は皆同じだ。」(第七・八句)しかし、死へと向かう宿命を、他の人々と共有したところで、李賀の絶望が慰められるわけではない。「長寿を授けるといふ神君・太一はどこに居る！」と叫ぶ第九・十句には、神をも信じる事ができず、孤独に時間と戦う、李賀の姿が浮き彫りにされている。

こうして李賀は、自力で絶望から脱出すべく、暗い幻想へと沈潜して行く。できることなら燭を銜んだ龍の足を切り取って、太陽が巡るのを押し止め、時間そのものを停止させてしまおうと、孤独に呟く李賀(第十二～十六句)。続く第十七～二十句には、「もし時間が停止したら、老いた者は死ぬことがなく、若者も嘆かずにすむであろう。儂い望みを、神仙術に託す必要もない。」と、自分の幻想に一人頷く李賀の姿が描き出される。

しかし、時間の停止などは、所詮空しい夢に過ぎない。幻想から覚めた李賀の目には、武帝や始皇帝の無残な死が、大写して迫って来る(最終二句)。武帝・始皇帝は共に、死を超克せんとする幻想を、最後まで抱き続けた人物である。が、そうした彼らの終末もまた、物言わぬ白骨と肉体の腐臭とであった。李賀は、自分を待ち受けている、避けようもない死の運命を、ここにはっきりと見い出すの

である。李賀の絶望は、こうして更に深まって行く。

時間は常に、李賀を絶望へと誘うキー・ワードである。落日の描写で始まる『日出行』にも、『苦晝短』と同様、時間を前にしての、李賀の恐怖と幻想が綴られている。^⑩

四、時間からの解放

李賀の詩の中に綴られている、不遇・病等の様々な実生活上の苦悩。これらの苦悩の根底にあるのは、時間的存在であることに対する深い絶望であった。『苦晝短』『日出行』は、こうした人間の存在基盤に本づいた李賀の絶望を、鮮明に浮かび上がらせた作品である。それだけに、ここからは、絶望から脱出するために、李賀が求めていたものを読み取ることも容易である。李賀が望んでいたのは、時間の消滅による、時間からの自己の解放であった。

『苦晝短』『日出行』には共に、時間の停止という、李賀の切ない願望が綴られている。が、これを現実世界において実現することは不可能である。李賀は、詩的世界という一個の独立した小宇宙の中に、時間を超越した世界(無時間の世界)を構築することによって、願望の実現をはかろうとした。一瞬であれ、李賀はここで、彼を終日苦しめて

いる時間から、真に解放されるのである。

では、李賀が詩的世界の内に、超越的時間世界を切り開

いて行く様を、『蘇小小墓』の中に見てみよう。

幽蘭露 幽蘭の露

如啼眼 啼ける眼の如し

無物結同心 物として同心を結ぶ無く

煙花不堪剪 煙は剪るに堪へず

草如茵 草は茵の如く

松如蓋 松は蓋の如し

風爲裳 風は裳と為り

水爲珮 水は珮と為る

油壁車 油壁車

夕相待 夕に相待つ

冷翠燭 翠燭冷やかに

綉光彩 光彩を綉す

西陵下 西陵の下

風吹雨 風雨を吹く

まず第一〜八句では、今まで日常的な時間の中で息づいていたはずの植物・露・風などが、李賀の目の前で徐々に非現実化して行くさまが描き出される。蘭の露は、涙をためた目。風はスカート。水は珮玉。草と松は、車のしとねときぬがさ。こうして、今はもう死んでしまつて存在しない蘇小小の姿が、様々な細部から、静かに静かに浮び上つ

て来るのである。

続く第九〜十二句は、存在するはずのない蘇小小が、密やかに息づく超越的時間世界である。現実と非現実との間を揺らめいていた人影は、ついに実像を結び、李賀の前に、蘇小小の姿が一瞬鮮明に浮かび上がる。約束の油壁車に乗り、青白い鬼火を灯して、ひたすらに恋人を待つ蘇小小が、それも束の間、一陣の風雨によって、彼女の姿はかき消されてしまうのである（最終句）。こうして李賀は、再び日常的な時間の内へと引きもどされる。『蘇小小墓』に開示されているのは、死者の息づく、現実世界の時間法則からは外れた世界である。この世界に居る限り、李賀は時間及び現実生活の苦悩から解放されている。が、李賀はここに長く止まることができないのである。静的イメージの連続から、動的イメージへの、暴力的とも言える瞬間的な移行。変化し時間であれば、動的イメージは、現実世界へと李賀を引きもどすのに、最も相応しいイメージである。

ではもう一つ、『李憑箏篋引』の中からも、超越的時間世界が開示される様を見てみよう。

吳絲蜀桐張高秋 吳絲蜀桐高秋に張る

空白凝雲頽不流 空白く凝雲頽れて流れず

江娥啼竹素女愁 江娥竹に啼き素女愁ひ

李憑中國彈箏篔 李憑中國に箏篔を彈ず

崑山玉碎鳳凰叫 崑山玉碎けて鳳凰叫び

芙蓉泣露香蘭笑 芙蓉露に泣いて香蘭笑ふ

十二門前融冷光 十二門前冷光を融かし

二十三絲動紫皇 二十三絲紫皇を動かす

女媧煉石補天處 女媧石を煉って天を補ふ処

石破天驚逗秋雨 石破れ天驚き秋雨を逗む

夢入神山教神嫗 夢に神山に入りて神嫗に教ふれば

老魚跳波瘦蛟舞 老魚波に跳り瘦蛟舞ふ

吳質不眠倚桂樹 吳質眠らずして桂樹に倚り

露脚斜飛濕寒兔 露脚斜に飛んで寒兔を湿ほす

李憑の箏篔が澄みきった天空に響き渡ると、現実世界の

時間と空間は、ピンと張りつめ始める（第一句）。箏篔

の音色が、天地を隈なく満たして行くにつれて、現実世界

の緊張度は高まり、ついには、空を流れる雲さえも動き

を止める（第二句）。今や時空の全てが凍りつき、聞こえ

て来るのは箏篔の音のみと思われた瞬間、『李憑箏篔引』

の世界は大きく飛翔して、異次元の世界の扉を開くのであ

る。

こうして切り開かれた音楽世界は、第十句まで続く。第

四句に「李憑中國彈箏篔」と歌われているように、この音

楽世界は、音楽を奏でる李憑を中心に、聴者たる李賀をも

包み込む形で創造された世界である。そこは、時間的に

は、唐代の李憑も始原の女媧も同時存在するという、現実

の時間の尺度では計り得ない、超越的時間の内に存在する

世界であり、空間的には、長安も崑山も天空も蘭の花も、

全てが遠近の差なく等質に存在するという、これまた現実

的空間の尺度では考えられない、超越的空間の支配する世

界である。また、「啼・愁・叫・泣・笑」というように、

様々な情緒が一度に解放された世界でもある。李賀は、こ

の生命の根源とでも言うべき世界へと没入することによっ

て、全ての人間的拘束から解放された、生命そのものと同

一体化する。が、こうした根源的世界も、第九・十句に

「女媧煉石補天處、石破天驚逗秋雨」と描かれているよう

に、やがては荘大な崩壊によって、クライマックスを迎え、

幕を閉じることになる。

第十一句からは余韻の世界である。第十一句「夢入神山

教神嫗」には、余韻の中で、音楽によって創造された世界

をさ迷い、薄れて行く音楽世界を何とか押し止め、再創造

しようとする努力が語られている。「教神嫗」とは正に、李

憑の箏篔によって奏でられた音楽を、神嫗に教えることに

よって再現しようとする試みなのである。しかし、第十二

句「老魚跳波瘦蛟舞」の「老」や「瘦」が象徴するように、再現された音楽世界は已に矮小化されてしまっている。音楽によって開かれた世界は、音楽の終了と共に、消え去ってしまう運命にあるのである。最終句の「露脚斜飛濕寒兔」は、いまだ余韻の世界の内にいて、現実世界へと帰りついていない心理状態を、地上から遙か遠くに在る「月」によって象徴したものである。

『李憑箏篋引』で李賀は、『蘇小小墓』では曖昧に終わった時間からの解放を、十全に遣り遂げている。しかも、時間ばかりでなく、空間の拘束からも解き放たれて、存在の根源へと降り立つことに成功している。が、こうした生の充足感が、いずれは断ち切られる運命にあるのは、『蘇小小墓』と同じであった。音楽が鳴り休んだ時、もしくは詩的世界が完結し終えた時、李賀は否応なく、現実世界へと引きもどされてしまうのである。

余談になるが、『李憑箏篋引』は、李賀が奏でた音楽を、李賀が聴き取り、言語へと置き換えた作品である。それ故、この作品は、李賀が音楽を聞く中で感じ取ったものを、正確に写し出していると考えて良いであろう。李賀は、詩ばかりでなく、音楽の内にも、自分を時間の拘束から解き放つ力を感じ取っていたのである。

五、まとめ

多くの人間は、自分の生命が有限であるという事実から目を背ける事によって、日々の平穩を得ている。が、李賀は、この恐るべき事実の隠蔽に失敗した詩人であった。刻々と縮まり行く自分の生命を自覚する李賀は、時間を恐怖しながらも、そこから目を離すことができない。実人生上の不遇や病が、李賀の絶望に更なる拍車をかけて行く。こうして李賀は、自分を苦しめる時間から、唯一解放される手段として、詩の内へと没入して行ったのである。詩の内へに開示された超越的時間世界の中で、全ての人間の拘束から解き放たれた李賀は、ここで始めて十全の生を得る。が、詩的世界が閉じてしまえば、李賀は再び現実へと投げ返されて、時間の恐怖に追いつめられて行くのである。

また、詩は、李賀の死後も永遠に読みつがれて行くという可能性によって、生命の有限性を打ち破る、李賀の唯一の武器でもあった。時間をめぐる様々な思いに駆り立てられて、李賀は、熾烈な苦吟に身を磨り減らして行ったのである。

注

① 根源的時間と自然的時間という分類に当たっては、ハイデッガーが『存在と時間』の中で分析している時間性 (Zeitlichkeit) と

通俗的な時間概念 (vulgärer Zeitbegriff) をヒントにした。

- ② 「時間の観念を二つのグループに分ける最も顕著な区別は、おそらく、時間の線的な概念(a)と円環的な概念(b)との間の区別であろう。」(『時間と人間』中央公論社、渡辺慧・渡辺ドロッテア) 時間について述べた書物の多くは、古来からの時間論を、直線と円環という二つの時間概念に分類して論述している。以後、論文中に用いられる直線の時間認識・円環的時間認識の定規等については、『時間と人間』の他、左記の書物を参考とした。滝浦静雄『時間』岩波新書・『時間』平凡社マリールイゼ・フォン・フランツ著、秋山さと子訳
- ③ 「生物の運命を知る者にとって、時間が二度と戻ることなく、一方的に直線上を進むという事は、当然考えつくことであろう。」(前掲書、平凡社『時間』の訳者解説より)
- ④ 「時間の線的な概念の中にもさまざまな変種があって、あるものは始原(創造)に出発点を持ち、あるものは終点(終末論)を持ち、そして第三のものは出発点と終点の両方を持つ。」(前掲書、『時間と人間』という解説からも解かるように、従来の直線の時間認識が想定しているのは、人間の一生などは遙かに超えた、長大な時間である。
- ⑤ 「這首詩表面は自己寛解、實在還是充滿了牢騷的意味、細看五六兩句、便可以體會到。」(『李賀詩集』葉葱奇編訂)
- ⑥ 「結二句說眼看綠眉一瞬也變成衰白、正當壯年的男子哪能果陸辛苦、受着無謂的驅策、而不自奮發呢？」(葉葱奇)
- ⑦ 「意思是說小人的排擠讒害、雖歷千年、怨憤也難消釋。」(葉

葱奇)

- ⑧ 「円環的時間は、少なくとも二つの理由から、最も容易に思いつかれる時間の理論的表象の一つである。第一に、われわれが生活の中で観察しているほとんどすべての変化は周期的である。第二に、円は有限の中に無限を包み込む最も古い手法である。」(前掲書、『時間と人間』)
- ⑨ 『中国の思考様式』(アーサー・F・ライト)編著、福井重雅編訳、金花舎) 在中論文。
- ⑩ 『時間』平凡社
- ⑪ 「白日下崑崙、發光如舒絲、徒照葵藿心、不照遊子悲、折折黃河曲、日從中央轉、嗚谷耳曾聞、若木眼不見、奈爾鏤石、胡爲銷人、羽彎弓屬矢、那不中足、令久不得奔、詎教晨光夕昏」(『日出行』)「這是慨歎歲月坐逝、久無成就的詩。第四句是全篇主旨所在、即古人所謂詩中的眼目、語句雖和『苦晝短』一首頗有相同的地方、而意旨却截然不同。」(葉葱奇)